

No. 6

近畿地方整備局
事業評価監視委員会
(令和7年度 第2回)

一括審議案件に対する意見等

【事業名】 九頭竜川総合水系環境整備事業	(再評価：一括審議)
委員からの質問	質問に対する回答
P7の「効果発現年次の見直しによる減少」とは何か。	前回評価について、環境整備では整備途中でも効果発現が期待できるものであったことから、添付の黒いバーチャートの事業期間中から便益を計上していた。今回評価においては、各事業の対策が完了した後にモニタリングを実施し、効果発現が明確になった時点から便益を計上するよう見直しを行っている。
今回評価に対する意見ではないが、CVMで世帯数を乗じていることについて、人口は減っているが世帯数が増えているということが全国的に起きている中で、本来であれば世帯を構成する人数を考慮した方が良いと思う。世帯を構成する家族の数が減っているため、一人当たりの額で考えないと辻褄が合わない。受益する人は減っているのに世帯は増えていくため、計算上は便益が大きくなる傾向にある。CVMの方法は、これから適切かどうか検討すべき。	御指摘の内容を踏まえ、評価方法については、今後も知見を蓄積して修正・改善していくように、本省に伝えて参る。
コウノトリは、河川事業そのものとは直接的には関係していないということが良いか。	その通りである。コウノトリの採餌場となるような河川環境が、河川管理者が目指している自然再生の目標となる。整備計画の中でコウノトリの飛来数を評価する指標は作っていない。
コウノトリは河川敷を利用する鳥類か。	コウノトリは、田んぼや河川の浅瀬に生息する小魚などを餌として好む生態である。河川管理者としては、水際に浅場をつくることによって、副次的にコウノトリの採餌場となるよう河岸の掘削形状を工夫している。
全体事業費がそれほど増えていないが、この増額で収まるという解釈で良いか。	自然再生事業は全体事業費が大きくないため、物価高についても2億円しか上がらない。
地元の方が九頭竜川総合水系環境整備事業をやっていることを知る場はあるのか。	流域懇談会の開催結果をホームページで公表しているものの、住民向けの説明会を定期的に行っているわけではないので、地域住民の方も治水事業と比べると、この事業を知る機会は少ない。事務所ではSNSのXを開設しており、小・中学生を対象とした水生生物調査などの環境調査状況を投稿しているため、少しずつ認知度は上がってきていると思う。
多くの人に知ってもらうことが大事だと思う。CVMにも影響が出てくると思うので、自然環境の保全や、生物の多様性にも価値を見出すというところを評価が高まるように語りかけていくことも、今後を考えると大事だと思う。	治水のパネル展と一緒に環境事業も展示するなど戦略的に取り組んでみる。
いろんな生物が増えてきているようなことを見ると、身近に触れてみようというところの誘因になると思う。SNSだと登録していない人にはなかなか届かなかつたりするため、新聞の半ページ使って取り上げてもらうような働きかけをして、知ってもらうのは大事だと思う。	御指摘のとおり、本事業を知ってもらうためには何が効果的か検討していく。
P11の順応的整備とはどういう意味か。	環境事業は治水事業のように定量的な目標を設定していないため、河床材料や生息・生育環境の異なる対策箇所毎に、掘削後にモニタリングするといったルーチンを繰り返し、試行錯誤しながら事業を推進しており、そのような意味合いで順応的という言葉を使っている。
気候変動によって大雨の回数が増えているが、環境整備事業で一度整備したところが損害を受けるとか維持管理費に影響を与えると聞いたことはないのか。	気候変動に伴う水災害の激甚化・頻発化が懸案となっているものの、近年、九頭竜川では中規模出水がなく、夏場は濁水傾向となっており、出水による自然攪乱が起らないため、河道内樹木が繁茂するといった課題を抱えている。一度の洪水で環境整備した箇所の形状が変わってしまうこともあるが、砂礫河原については自然の営力により維持されることが望ましいと考える。

【事業名】 九頭竜川総合水系環境整備事業	(再評価：一括審議)
委員からの質問	質問に対する回答
再整備費の計上は、別事業という考え方になるのか。	整備箇所が被災した場合の再整備費用は見込んでいない。仮に、復旧が必要となれば河川維持費等を投じることが必要と考える。
P7とP9の表について、左が前回で右が今回と統一した方が良いと思う。	修正する。
流域面積が福井県の約7割を占めるということを教えてほしい。	福井県の全体面積に対して、九頭竜川の流域面積が占める割合が約7割ということである。
P5 ヤナギ林について、H30の施工後、拡大が抑制されているが、施工後にメンテナンスをしているわけではなく、洪水に頼ってこの状態が維持されているのか。	特にメンテナンスを加えてはおらず、一度切り下げたことによる効果が維持されているものと思料する。整備効果の発現が損なわれることのないよう適切な維持管理が必要と考えている。
P5 オオヨシキリとオオジュリンについて、H30以前のBeforeのデータが示されていないため、増加傾向と見てもよいのか分らない。	過去、指標種を対象とした調査を実施していない。昭和の初期・中期の人工構造物が無かった時代は、ヨシ・マコモ群落を好むオオヨシキリやオオジュリンなどの野鳥がたくさん生息していたと考え、当時の好ましい河川環境を取り戻すことを目標に自然再生事業を推進している。事業効果として、オオヨシキリの確認個体数が増加傾向にある。
P6のみお筋とは何か。	平常時に流水が流れている道筋（最も深い部分）を「みお筋」と言う。
みお筋と樹林化の進行とはどのような関連があるのか。	河川の幅は約200～300mあり、そのうち20～30mの部分に水が流れている。このような状況が続くと、水の流れがない部分では、上流から漂着・飛散してきた種子から植生が繁茂し、根が伸びることにより陸部が固定され、樹林化が進行するといった悪循環に陥る。昔は砂礫で構成されていた水際や中州が樹木に覆われるといった状況である。
上記に関連し、今回木を伐採し、砂礫を入れたら、ある程度状態が維持されるものなのか。水量の問題もあると思うが。	高度経済成長期に上流域にダムを整備し、洪水を調節することで生命と財産が守られてきた。一方で、河川環境の視点に立てば、洪水の発生頻度の低下により自然攪乱が起こらず、砂礫河原の樹林化が進行している。砂礫河原を保全・再生していくのが本事業であり、流域懇談会等で学識者からご助言をいただきながら、順応的・段階的に整備を進めている。
オオヒシクイは具体的にどうなったのか。	H18年以降、確認個体数60～70羽程度で横ばい傾向となっている。
便益算出するにあたり、九頭竜川は464円/月・世帯、116,069世帯で105億円の便益がある。円山川は596円/月・世帯、59,092世帯で122億円の便益が出ている。計算根拠を確認したい。	九頭竜川の便益より円山川の便益のほうが比較的早めの計上であるため、社会的割引率の影響により円山川の便益が九頭竜川の便益よりも大きい。

【事業名】 円山川総合水系環境整備事業	(再評価：一括審議)
委員からの質問	質問に対する回答
中郷遊水地は、古くから計画があって整備が進められているところか。	治水事業としては平成16年台風第23号洪水による被害を踏まえ、緊急治水対策として激特事業後に遊水地整備を進めていくことを決定し、平成25年策定の河川整備計画に位置付けを行い、設計や用地買収を実施、令和元年度より工事を開始している。環境事業としては令和2年度から治水事業で掘り下げたところを湿地環境にしてきた。
総便益の世帯数の更新による減少とあるが、高齢化が進んでいることと、農業離れが進んでいることなのか。	大学が少なく若者が外に出て行き戻ってこない。高齢化も一因となり農家も減っている。
総費用の諸経費を対象外とあるが、その内訳は。	事業に直結していない、給料や諸費用となる。
大洪水があった時に、環境整備してきたところは一掃されてリセットされてしまうのか、ある程度自然に戻っていくのか、ある程度手を入れないといけないのか。	湿地再生したところも一時は埋まってしまうが、自然復元もしていく箇所もある。完全に元に戻るのは難しいが、円山川水系自然推進委員会で学識者の方々の意見を聞き、順応的整備をしていく。
P6 R1年度にコウノトリの飛来数がかなり突出しているのは何か特別な状況があったのか。	コウノトリの郷公園が実施していた給餌活動が変更となり、給餌時間と調査時間が近くなったため、コウノトリが餌を食べた後に湿地で休息していたと考えられる。
P6 R3年度も突出しているが理由は。	飛来状況調査を例年より1～2週間早くしており、アユの産卵時期と調査時期が重なっていたため、コウノトリが捕食するために多かったと考えている。
P4 国内の野外こうのとり個体数の推移にある455羽は、豊岡の辺りという理解で良いか。	全国である。
コウノトリの個体数については、湿地面積のような目標はあるのか。	特段個体数についての目標は持っていない。
P7 右側の置き石の写真について、瀬・淵がどこにあるのかわからない。ワンドはあるが。「瀬・淵を創出する」という書き方だと誤解を招く可能性があるため、修正すべき。	この写真は、単調な流れを多様な流れの事例として挙げている。写真には瀬が無いため修正する。
P7 右下のグラフで魚種が増えているが、本来いるべき魚種が増えたということで良いか。いるべきではない種類も含まれているのか。	データを確認したところ、魚種が増えている中で、外来種も確認。 P7 右下のグラフの吹き出しを「置き石設置箇所の方が、魚の個体数、種類ともに多いことを確認している。なお、極めて少数の外来種も確認している。」に修正。

【事業名】 円山川総合水系環境整備事業	(再評価：一括審議)
委員からの質問	質問に対する回答
湿地再生の箇所について、元々誰の土地だったのか。保有地だったのかと思うが、民地内も含めて考えることもありえるのか。	P5の加陽地区については、休耕田であり民地であったところを用地買収して再生をした。 P7の中郷遊水地については、河川区域だが、豊岡市の運動公園や田んぼがあり、用地買収をした。
P10の支払い意思額について、大体200、300円が多く、R5の新宮川水系の事業再評価では300円程度だった。円山川は596円と高い方で、世帯数も多いが、B/Cが1.1で小さい。コストが大きいと理解しているが、調べておいていただきたい。	円山川は、特別天然記念物コウノトリの再生・保全を目指し、また『特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約』ラムサール条約が定められている貴重な地域であるため、湿地再生にかかる費用が大きい。また、円山川の環境事業として、掘削に加え、環境護岸や魚道整備におけるコンクリート構造物のほか、湿地再生のための用地買収にも費用を要している。